第706号 平成16年3月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2004年（平成16年）
3月号（No. 706）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-info@jac.or.jp

14座・7大陸・百名山……世も末のカタログ登山

池田　常道

8千㍍峰をいくつ登ったとか、7大陸最高峰をきわめたとか、はたまた深田百名山を全部やっつけたとか、ヒマラヤから日本の山まで、ピークの数ばかりに目が行く昨今だ。登山の深遠な意味や個人にとっての価値などは、なかなか他人には説明しがたいものだから、いきおい分かりやすい数字がモノをいう。登山の素人にすぎないマスコミならいざ知らず、最近では専門誌や登山者自身もそれにとらわれている気味がないでもない。

じっさい、これらのタイトルを売り物にしたガイド付ツアーもさかんに行われ、多くの顧客を集めている。ヒマラヤでは固定ロープを張りめぐらし、酸素を吸わせて頂上まで引っ張りあげるかと思えば、国内では2つ3つの「名山」を一挙に片づけるべく組まれた過密日程で、雨風も恐れず突進する。エヴェレスト登頂ツアー6万5千ドルが高いのか、百名山登頂ツアー5万円が安いのか、どちらがどうとも言えないけれど、こういったものが存続できるぐらいに需要があるのは事実だろう。

すべての登山愛好家がこういった病にとらわれているとは言わないが、山小屋で泊まり合わせた人に「百名山、何個登ってます？」などと聞かれる場面は珍しくない。そこで正直に「まあ30くらいかなあ」なんて答えると、たちまち軽蔑の視線を浴びる程度に蔓延している現象ではある。

「8千㍍、何個登ってます？」なんて聞くヒトにはさすがにまだ会ったことがないけれど、いまやエヴェレストには延べにして2千人近い人が登っている時代だから、近い将来ヨーロッパの山小屋あたりで、「あんた日本人？　エヴェレスト登ってます？」なんてことになってもけっしておかしくない。ちなみに、エヴェレストに登った人数が一番多い国は、あたりまえだがネパール、日本はアメリカに次いで第3位である。

1980年代なかば、ラインホルト・メスナーとイェジ・ククチカのみだった8千㍍峰14座登頂のタイトル保持者は、90年代に入って4人が加わり、さらに2000年から昨年までの4年間に5人ふえて都合11人となった。あと1、2座に迫っているのが7、8人ひしめいているから、そのうち何人かが今年中に「8千㍍クラブ」の仲間入りを果たすのはほぼ確実だろう。

目　次

世も末のカタログ登山……1
100周年ニュース……4
追悼・風見武秀名誉会員……5
平成16年度事業(委)行事予定‥5
報告……6
　山岳地理・相模野基線
Climbing & Medicine・31……7
支部だより……8
　宮崎／熊本
東西南北……10
　39年ぶりの再会／ふたつの会報
海外の山……12
図書紹介……13
　『日本の探検者たち』『禁断のアフガーニスターン・パミール紀行』
INFORMATION……14
ルーム日誌……15

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 ……10～20時
水・金 ……13～20時
第2、第4土曜日 ……閉室
第1、第3、第5土曜日‥10～18時

しかし、初期の14座登頂者が長いヒマラヤ経験のなかで徐々に積み上げ、結果として14座登頂が成ったのに対して、最近のそれは、どちらかといえば最初からゴールありきの登山、ノーマル・ルートからただ頂をかせがんがための登山に見える。

その過程で、実はほんとうの頂上に登っていない事実がいくつか指摘されもした。ブロード・ピーク前衛峰やシシャパンマ中央峰といった手前のピークで終わっていた、あるいはローツェの最高点まで登っていない等々。いやしくも記録として公表するからには、すべての山の最高点に立たなければならないのは自明の理だ。というわけで、最近の14座登頂者のなかには、あらためてそれらを登り直してめでたく完登成った例がいくつかある。

1970年、ナンガ・パルバット南壁での衝撃的なデビューから約10年間にわたって高所登山シーンをリードしてきたメスナーが、80年のエヴェレスト単独・アルパインスタイルを区切りとして、残る9座を、もっぱらノーマル・ルートから片づけにかかったとき、登山界には「なにか違うぞ」という空気が流れた。バリエーション・ルート、アルパインスタイル、無酸素と次々に新機軸を実現して世のクライマーを鼓舞してきた彼がたんなるピークハンターに堕したと見て取ったからだ。

むしろ、メスナーのあとを追うように着々と8千㍍峰登頂を積み上げてきたククチカが人々に注目された。そのほとんどが冬季、バリエーション、縦走といった彼の登頂履歴は、ポーランド・ナショナルチームという後ろ盾があったにせよ、過激さにおいてメスナーをしのぐものがあったからだ。だが、そのククチカにしても「メスナーの後を追うことにした」のが原因で、84年を最後にアルパインスタイルのよき相棒だったヴォイチェフ・クルティカと袂を分かつ結果になった。

86年秋、メスナーがマカルーとローツェに登って一番乗りを果たし、ククチカは翌年シシャパンマでゴールした。一方、2人の先陣争いがくりひろげられた80年代前半には何人かライバルも出現した。なかでもマルセル・リュエディは、メスナーと同じ秋にマカルー、ローツェ、エヴェレストを一挙に登ろうと企て、最初の頂から下る途中に倒れた。行き過ぎた野望の果ての壮絶な死だった。

じつはメスナー自身80年に書いた本のなかで「ぼくが創り出すセンセーションにしたところで、78年（エヴェレスト無酸素登頂とナンガ・パルバット単独行）以上に大きなものにはならない」と、はやくも告白している。そのことを自覚しつつ後の6年間は、ただ最後の目標に向けて歩んだのだ。

彼の誤算は、14座完登に思わぬライバルが現われて泥仕合の様相を呈したこと、さらにその後つぎつぎに追随する者が出て、14座完登がヒマラヤ登山のひとつの目標として定着してしまったことだろう。

クルティカのように8千㍍峰ピークハントに背を向けるクライマーは、残念ながら少ない。14座に登ることが容易とは言わないが、人気ピークに多くの登山隊が集中するこんにち、継続的に遠征をくりかえす根気と資金さえあれば手に入れることのできるタイトルなのだ。かつてのイタリア「クォータ8000」や最近のチベット登山協会、カザフ共和国のようにグループのプロジェクトとして14座完登を目指す例まである。

登山がスポーツか否かという論議はさておいて、記録という観点からすると、8千㍍峰14座は、たとえばマラソンの2時間6分や100㍍走9秒台と同義ではない。陸上競技では単純な数字のなかにパフォーマンスの価値がほとんどすべて表現されているのに対して、14座完登は登山の内容を物語るものではけっしてないからだ。

7大陸最高峰にもおなじことが言える。85年春にディック・バスがエヴェレストに登って達成したものだが、彼の「セブンサミッツ・オディッセイ」は、8千㍍峰14座に比較すれば到達可能な目標だけに（7つの頂すべてがいまやガイド付ツアーで登れる）、世界中から志願者が殺到した。

ずいぶんと昔、故・植村直己が南極（当時は入山がかなわなかった）とオーストラリア（当時山として認識すらされていなかった）を除く5大陸最高峰に登ったと話

題になったことを記憶するが、これに2つを加えたのがバスである。しかし、ハイキングで登れるオーストラリア最高峰（コジアスコ）ではあまりにもナンだ、というわけでパット・モローはオーストラレーシアという概念を持ち出し、少しは歯ごたえのあるカルステンツ・ピラミッドを7つめに据えた。だから、セブンサミッツには現在2つのバージョンがあり、当然コジアスコ・バージョンで達成した人のほうが多い。

それにしても、バスがエヴェレストという最後のピースを手に入れるのに支払った対価は尋常ではなかった。いくつもの公募隊に参加して失敗した挙げ句、最後にクリス・ボニントンをふくむ強力なノルウェイ隊にガイド役のデイヴィッド・ブリーシャーズをつれて加わったのだが、いずれの場合も1隊員以上の金額を出資し、ときには1隊まるごとのスポンサーにもなった。個人の道楽としては結構なことであるが、同時にある種の「いやらしさ」（クラカワー『空へ』より）をエヴェレストに持ち込むことにもなった。

多くのセブンサミッツ志願者にとって問題は、山としては桁違いの世界最高峰に登らなければ夢は完成しないということだ。常にヒマラヤを経験しているわけでもない人にとって、アコンカグアにあと2千㍍をプラスすることは、たとえ酸素が潤沢に与えられ、シェルパのサポートがあってさえやさしいことではない。経済的にも肉体的にも、そして精神的にもかなり無理しなければ事は成らない。いっぽう引率するガイドも、登りたい顧客の熱意を尊重し過ぎたり、登らせたい著名人にかまけてひとたび判断のバランスを欠いたりすれば、96年春のような隊全体の悲劇に陥る危険がある。

こんにちエヴェレストを目指す人のすべてというわけではないが、ただでさえ人の目を集めやすい世界最高峰が、セブンサミッツの重要なピースとして一層注目されていることは事実だろう。ヒマラヤに縁のなかった人までが、7つの頂を達成するためにエヴェレストへやってくる時代なのだ。

多大な労力を費やして山へ登る理由が他人の創り出したひとつのメニューを追いかけることだとしたら、なんとも哀しくはないか。8千㍍峰のとなりにはもっと登り甲斐のある山（たとえばジャヌーやヌプツェ、ガッシャブルム4峰）があり、7大陸第2の高峰（たとえばK2やマウント・ケニヤ）は最高峰より手応えがある。日本百名山ブームにしてもかれこれ20年以上続いているが、深田百名山をなぞるよりもっと心の琴線に触れる山登りがあるだろう。

これが商売の世界だったら、たくさん売れたほうが勝ち組というわけだろうが、山に登るということはもともとそんな価値基準とは無縁な行為だったのではないか。みんながやるから自分もやるのか、他人がやらないからあえてやるのか、その相違はけっして小さいものではない。

ここまで駆け足で述べてきたので、ひょっとすると誤解を与えるかも知れないといささか不安になった。たとえば「8千㍍峰は地上最高の山々だ。それをめざして何が悪い」とか、「個人の楽しみとしての百名山があってもいいではないか」とかいった反論が当然予想される。

もちろん、そういう山登りをやるな、などと言うつもりはない。それこそ個人の自由なのだし、エリートにしか許されなかった場所（たとえばエヴェレスト）へだれもが挑戦できることは、それ自体べつに悪いことではない。深田百名山が中高年登山者の努力目標としてあってもよい。しかし、だれもかれもがそういったブームに賛同しているわけではないという事実、もっとマシな山登りがほかにあるという真理を認識しておいてほしいだけだ。

だいいち、ゴールに到達したあと、あなたはどんな山登りをするのか。百名山が終わったら二百名山、三百名山を踏破するのか。7大陸最高峰を登ってしまったら世界各国最高峰でもめざすのか。それであなたは山登りを楽しんでいるのですか、という問いかけがこの小文を書いた主旨である。

とりわけ、アルピニズムに傾倒し、冬の岩壁登攀に情熱を傾けたほどの人が、いざヒマラヤに行くと凡庸な山登りしかしない（できない）という現実に、いささか幻滅していると言ったら言い過ぎだろうか。

100周年記念事業「日本人の足跡を訪ねて」海外トレッキング企画の概要（上）

記念登山隊実行委員会　トレッキング担当委員　**黒川 惠**

本企画は、日本人が辿った山岳地や辺境地を、専門旅行業者との提携によってツアー化し、会員サービスの一環として位置づけながら広く参加者を募集するものです。
①各企画出発日のおよそ１年前に、募集要項を発表します。
②各企画出発日のおよそ１か月前に、参加要項を発表します

「日本人の足跡を訪ねて」シリーズ（企画概要）

１．アルバータ展望雪山登頂
□時期：2005年7月
□期間：約10日間
□日本人の足跡：1925年、槇有恒氏らによるアルバータ初登頂
□ポイント：初登頂80周年記念。サスカッチュワン氷河よりコロンビア・アイスフィールドへ入山。槇隊が登れなかったスタットフィード峰へ登頂し、真っ正面にアルバータを眺める。雪山経験者向き。

２．カナディアン・ロッキー、グランド・ハイキング
□時期：2005年7月
□旅行：約9日間
□日本人の足跡：1925年のアルバータ以降しばらく途絶えたロッキーへの登山隊は、1960年代から70年代になり、アルバータへの挑戦やJAC学生部など活発な動きが見られるようになった。
□ポイント：カナダ山岳会のクラブハウスがあるキャンモアから、バンフ、ジャスパーにかけての山岳展望を楽しみながら、各所でハイキングを楽しむ。ホテル連泊として、中高年会員がゆったりと山歩きを楽しめるように配慮する。

３．マナスル初登頂の足跡パノラマ・トレッキング
□時期：2005年10月
□期間：約9日間
□日本人の足跡：1956年、日本山岳会隊によるマナスル初登頂（日本人初の8000m峰登頂）。1960年、慶応大隊によるヒマルチュリ初登頂。1970年、大阪大隊によるP.29初登頂。
□ポイント：カトマンズからヘリコプターでマナスル山麓のサマへ。初登頂時のルートを一望にしながら周辺を日帰りトレッキング。マナスルに加えて、“日本人の山”ヒマルチュリ、P.29など周辺の山々も展望。

<1～3の担当：アルパインツアーサービス㈱>

４．チョモランマBCとエヴェレスト街道
□時期：2006年4～5月
□期間：約15日間
□日本人の足跡：1970年、日本山岳会隊によるエヴェレスト登頂（日本人初の世界最高峰登頂）。1980年、日本山岳会隊によるチョモランマ登頂（中国側）。1988年、日本・中国・ネパール三国合同隊によるエヴェレスト南北交差縦走。
□ポイント：エヴェレストを南北両面から展望。ラサから車でチョモランマBCへ。さらに、車で中国・ネパール国境を越えてカトマンズへ。空路ルクラへ飛びトレッキングでホテル・エベレスト・ビューへ。

５．エヴェレスト街道、ホテル・エベレスト・ビューとシェルパの里
□時期：2006年4～5月
□旅行期間：約9日間
□日本人の足跡：ツアー４に同じ
□ポイント：カトマンズから空路ルクラへ飛びトレッキングでホテル・エベレスト・ビューへ。エヴェレストをはじめクーンブ・ヒマールの名峰群を展望。当時の関係シェルパとの交歓など。

６．マナスル三山展望とポカラ山岳博物館
□時期：2005年11月～2006年1月の間
□期間：約8日間
□日本人の足跡：ツアー３に同じ
□ポイント：日本との関わりも深いポカラの山岳博物館を見学後、車でベシサールへ行きトレッキングでマナスル三山の西面を望むバグルンパニへ。ロープウェイで巡礼地マナカマナも訪問。
<4～6の担当：ヒマラヤ観光開発㈱>

＊アトラストレック、ウェック・トレック社の企画は来月号に掲載の予定です。

追悼
山岳写真界のパイオニア 風見武秀さん急逝

羽田　栄治

90歳近くまでカメラ片手に世界を駆け巡っていた風見さんが亡くなった。突然の悲報が飛び込んできたのは、年が明けた1月の上旬。

昨年暮れの年次晩餐会では珍しく欠席されていた。旧知の人との出会いを楽しみに、風見さんは、これまでかかさずに出席されていたのだが。昨年の秋以来の消息が気になっていたが、まさか病の床にあろうとは想像しがたいものがあった。そして晩餐会も終わった年の暮れ、病が悪化し12月20日、肝臓癌で急逝した。享年89歳。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

風見さんは1914（大正3）年、東京・麻布で生れる。昭和の初め頃から登山と山岳写真を始め、早くから山の写真を撮っていた船越好文さん（物故名誉会員）らが結成したカメラ・ハイキング・クラブ（CHC）に入会。後に東京山岳写真会（日本山岳写真協会の前身）の旗揚げをする。

1942（昭和17）年、日本山岳会に入会（会員番号2205）するが、当時太平洋戦争の最中のこと、風見さんは海軍の嘱託としてニューギニア各地へ赴く。

1946（昭和21）年に復員すると、翌年、銀座で写真材料店を経営するかたわら山岳写真家として精力的に活躍する。また戦後、新発足した日本山岳写真協会の副会長をつとめ、後に会長となる。

昭和30年代に入ると風見さんは、日本の山から海外の山へと写欲を燃やす。1958（昭和33）年、作家の深田久弥さんらとパーティーをともにしネパールヒマラヤへ。以来海外の山に魅せられ、撮影は年々地球規模で広がっていった。初のヒマラヤ行きから32年、撮り歩いた国は75か国にわたるという。「行きたい者は行くことだ」というドイツの諺を好み「撮りたいものは撮ることだ」。これを自分の信条として半世紀、世界の秀峰を撮り続けてきた。

山岳写真界に多くの功績をしたことで、1986（昭和61）年に勲四等瑞宝章を授与された。

人にへだてなく、冗談好きで気さくな風見さん。多くの写真人や岳人にも好かれ、尊敬されていた。また同好会アルパイン・フォト・クラブの写真展にも快く展示させていただいた。深謝するとともに、今、あらためて弔意を表したい。

写真展約80回、写真集、著書など20数冊に及ぶ。　合掌。

事業委員会
平成16年度行事予定表

4月7日～5月20日	海外登山	タンギ・ゴイ・タウ
5月28日～5月30日	若葉山行	秋田・乳頭山 房住山付近山菜採り
7月9日～7月11日	夏山登山	加賀・白山
8月26日～8月29日	海外登山	韓国・仁寿峰・仙人峰
10月8日～10月11日	紅葉山行	伯耆大山・三瓶山
11月27日～11月28日	雪上訓練	富士山
12月5日	晩餐会記念山行	東京近郊の山
1月8日～1月10日	懇親スキー	未定

四季を通じて山行計画を用意いたしました。奮ってのご参加お待ちしております。ご希望の山域等ございましたら事業委員までご連絡下さい。

報告

2月

Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

AGC（山岳地理クラブ）―

再度相模野基線を訪ねる

当会発足時第1回フィールドとして、平成13年5月26日、地形図作成の基礎となり三角測量の原点となる相模野基線を訪ね歩いた。その後連光寺村、日本経緯度原点、浅間山さらに鹿野山、丹沢山等と続いているが、今回は会員も増え、初めての人もいるので、再度相模野基線を訪ねてみることにした。

この相模野基線は明治15（1882）年陸軍参謀本部測量課（後の陸地測量部・現在国土地理院）に測量され、全国統一を目的とした基線としてはわが国最初のものである。基線南北両端の距離は5209・9697㍍となっている。

明治35年の測地学委員会による相模野基線測量報告書では、10㍍鋼鉄の巻尺を用いさらに5㍍の氷漬鋼鉄側棹と10㍍の鋼鉄巻尺を用いている。実施に当たっては南端点より新たに中間点を設置、北端点より10㍍のところに補充点を設けた。大正15年の測量結果ではこの基線の長さが5210・2125㍍の値になった。

平成15年11月9日（日）田園都市線すずかけ台駅に集合。本日一番目の調査地へ向かった。2万5千分の1の地図、磁石とGPSを携行し、20分ほどの歩行で横浜市緑区長津田町（東工大長津田校舎の南）にある飯綱神社に到着。周りは畑に囲まれた小高い場所で眺めはよさそうだが、あいにくの天気で遠望はきかず。神社境内の南の端に一等三角点は取り残されたように設置されていた。点名は長津田村、さっそく磁石にて三角点の向きを測定、さらにGPSで位置を測定する。写真撮影後次の調査地基線の南端点へと向かう。

一等三角点相模野基線南端点

小田急江ノ島線の南林間駅から西へ約1・3キロ、緩い坂を上りきった内科医の庭にそれはあった。

点名「座間村」傍らの御影石には「相模野基線南端点　一等三角点座間村　当基線は、日本の近代測地測量を実施するにあたり、明治15年日本で最初に設置されたものです。南、北両端点の長さ5209・9697㍍をもとにして我が国の地図は作られました。最近では、この長さの変化を精密な繰り返し測量で見つけて、地震予知等に利用している大切な測量基準点です　建設省国土地理院」と刻まれていた。

四等三角点基線中間点

次の中間点へは相模野台地をひたすら北上する。この平坦な台地は、明治期には人家も少なく基線の設置には最適の場所であったのでは、との思いにひたる。南端点から2610㍍の距離で、相模が丘住宅街の道路に埋設されていた。マンホールの蓋を開けて位置の確認をする。公園の傍らには座間中央ロータリークラブの手による案内板があり、この基線について丁寧な説明がなされていた。

一等三角点北端点

北端点は北里大学東病院の南、麻溝中学の西側に設置されていて、ここが最もよく整備され相模原市教育委員会が設置した解説板は北端点の沿革、基石の構造や位置など図解入りで解説されていた。GPSで南端点との距離を測ると5210㍍を表示、数字の正確さになんとなく嬉しくなった。

本日最後はこの基線から西へ延びる鳶尾山の一等三角点に向かう。バスを降りると鳶尾山ははるか彼方と思ったが現在は麓の中津小学校の一角に移設されていた。現在鳶尾山山頂には明治16年に三角点を設置した際に使った「偏心点」が当時のまま残っているとのこと。現存する偏心点としては、2例しか確認されていないという。

中津小学校に到着したものの、そこにはなにも見つからない。探し回るうち近くにいた小学生の話では、2年前ここで怪我人が出たので撤去したとのことである。それではその痕跡だけでも、と当直の先生に尋ねたがあまり要領はえ

Climbing & Medicine・31

若年スポーツクライマーについての問題点

中島　道郎

ヨーロッパでは近年、18歳未満の、まだ成長期にある年齢層の若者の間に、過酷な登攀に熱中し過ぎたあまり、指の関節に一生取り返しの付かない障害を残すことになった症例が増えてきており、それが関係者の間で問題になっているという。本邦でも、近年スポーツクライムがオリンピック種目に取り入れられそうだという期待の高まりに伴い、10歳未満の幼年期からこのスポーツに入る機運が醸成されつつある。彼ら日本の若者達に前者の轍を踏ましめないよう、大いに注意を喚起する必要があると信じ、一文を草する次第である。

手指は、3本の手指骨と3個の手関節（拇指は例外）から成るが、若いうちは手指骨の両端に成長線というやや脆弱な部分があり、ここに過大なストレスがかかると骨がずれて変形したり成長が止まったり、さらには手関節が膨れて変形したりする。

現在、ヨーロッパのスポーツクライム関係者の間で、指先（第一関節）だけで体を支える登り方（cling）が問題になっている。こういう危険な登り方ではなく、掌を使って（grip）安全に登るべきである、という教育を、トレーナーのみならずクライマーの両親にも施し、正しい認識を徹底させる必要がある、というのである。そして、手指骨に上述したような変化が生じていないか、少なくとも年に1度はレントゲン検査を行って経過を観察すべきであると忠告する。

我々オールドクライマーの時代には、第一指関節だけで登攀するなど、タブーであったし、岩登りでスピードを競う、などという考えはなくて、いかに安全に着実に登攀するかが問われた。それが今や、昔は3日かかった岩壁を、4時間で踏破した、という英雄が出現する時代になった。彼を追い越そうとする後従者はあとを絶たないであろう。しかしそれを時代風潮として放任せず、本人が生涯禍根を残すような無知な登り方をさせないよう、正しい登攀技術を普及させなくてはならないと、ヨーロッパ諸国の識者は忠告している。我々はこの教訓を我がこととして、真剣に取り組まねばならない。

幸い本邦でも、本会前副会長で整形外科医の大森薫雄博士を中心に、この問題に取り組む動きがあるやに聞いている。それが1日も早く軌道に乗ることを、筆者は希望してやまない。

なかった。

間もなく砂に埋もれたマンホールの蓋が見つかり、日本全土と国土地理院の刻印があった。事故を契機に地下に埋設したとのこと。残念ながら蓋を開ける専用の機具がないので中の確認はできなかった。日本国地図作成の原点のひとつが、自校の一角にあるという恵まれた環境にあるのだから、その意義などを地理の教材にしてはとの思いに駆られつつ場所によってその取り扱いに差があることもわかった。

（平野）

山の本の古書店
在庫目録年2回（5月・11月）発行
ご希望の方お申込ください。
ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に！
古書買入　**晴山書房**
東京都中野区上鷺宮4－6－3
TEL&FAX　03(3990)4540

JAC 支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況をリポートします。

宮崎支部

第11回九州5支部懇談会、交流登山の集い

100周年九州地区記念事業内定

太陽と緑の国、日向路へようこそ。「山」という共通の場で出会いと絆を大事にして、自然を愛し、自然と共生しようとする理念をもつ九州地区の会員74人が1月17、18日の両日、宮崎市の「ひまわり荘」に集い山を語りあった。

第1部は、九州5支部等の活動状況と日本山岳会創立100周年九州地区大会として平成17年7月16、17日、宮崎・えびの高原での開催計画案が宮崎支部から提案され、5支部の賛同を得ることができた。今後、本部の指導を受けながら心に残る地区大会にしたい。

今回のメインテーマは、九州地区としての日本山岳会創立100周年記念事業への対応である。本部の藤本慶光常務理事の講演も「日本山岳会創立100周年記念事業の推進」を提唱され、実績と伝統を礎にした日本山岳会として、本部各委員会の取り組み状況、新日本山嶽誌、日本山岳会百年史の刊行、中央分水嶺の踏査、海外トレッキングおよび記念事業の地区大会の開催等についての講演に、会員は瞳を輝かせ、メモをとる真摯な姿に感動した。

講演の後、宮崎支部山行委員長・谷口菊美が制作したコーヒーカップが、宮崎支部から県外参加会員に記念品として贈られた。

100周年に向けて九州地区も始動

盛会だった懇親会、交流登山

第2部の懇親会は、藤本常務理事の乾杯の音頭に続き、宮崎支部の井戸川三男会員が「尺八・山の朝」を、菊池玲会員が「宮崎民謡・刈干切唄」を披露すると万雷の拍手であった。岡本真理子会員の軽妙な司会で各支部からお国自慢が次々と披露され、大盛況のうちに10月の熊本・全国支部懇談会での再会を約して幕を閉じた。

第3部の交流登山は、18日、朝霧に包まれた国富町・釈迦ヶ岳（830メートル）に64人が参加した。釈迦ヶ岳は伝教大師・最澄も登った霊験の深い山であり、平安時代の女流歌人・和泉式部にまつわる伝説と日本三大薬師寺・眞金山法華岳がある。

8時20分、登山開始、5班に分かれ照葉樹の生い茂る尾根道をコショウノキの白い花などを愛でながら2時間で山頂着。北側の掃部岳の冠雪と雲海の中の宮崎平野を堪能した後記念撮影を行って、正午過ぎには法華岳駐車場に下山。日だまりで昼食をすませて解散式。県外会員は宮崎の観光スポット「酒泉の杜」を訪ね、焼酎、ワイン、ガラス工芸を賞味、観賞して帰路についた。（井野元　繁）

創立100周年記念事業にご協力を

熊本支部

平成16年新年会

毎年、最初の支部行事は新年会で始まる。本部の年次晩餐会にならって始まった新年会も、早いもので今年で24回目となり、すっかり支部の行事として定着した。

1月10日（土）午後6時半から熊本交通センターホテルで開かれ、24名の会員が出席した。

冒頭、挨拶に立った工藤支部長は「今年は全国支部懇談会の熊本での開催という大きな行事が待ち構えています。まだ先のことと思っていましたが、開催まで10か月を切りました。皆さんの絶大なるご協力をいただいて、ぜひ大会を成功させたいと思います」と決意を述べ、会場は温かい拍手に包ま

れた。

続いて本田前支部長が、4月から始まる100周年記念事業の中央分水嶺踏査にも多くの参加をお願いしたいと述べて乾杯、宴会がスタートした。

会場では、日頃から支部行事によく参加する人も、1年に1度だけ新年会に姿を見せる人も、いつものように仲良く一堂に会して大いに、飲み、食べ、おしゃべりして賑やかに新年の挨拶を交わした。

宴たけなわとなるころ、昨年、新しく会員となった石井、加藤、安場の3氏が紹介され、そのあと再び工藤支部長がマイクをもち、あらためて全国支部懇談会、中央分水嶺踏査、100周年記念事業および募金について説明を行い、支部会員の支援と協力をあらためて要請した。

24回目となった熊本支部新年会

宴の後半は恒例の出席者の新年の一口メッセージが披露されたが、歳をとるのを忘れて、国内はもとよりヒマラヤ、カナダなど世界の山へと足を延ばした報告が相次いで、支部会員の活躍の様子がうかがえた。

楽しい歓談の続くなか、8時半を過ぎたところで記念撮影を行い、阿南会員から提供された山のカレンダーと広永会員から提供された山の花の絵葉書を新年のおみやげにして散会した。

県境踏査リターンマッチ

支部設立45周年記念行事として、平成10年にスタートした熊本県境踏査は平成13年の暮れに終了した。

当初、県境線をトレースする予定が、実働会員の少ないことや、ヤブの密生したルートの多さもあって次第にトーンダウンし、いつの間にか県境線の山に登ることになってしまった。そのため、区間によっては踏査が不完全な箇所がいくつか残ってしまい、終わったあとも気になっていた。そこで昨年の秋から支部の例会として、これらの区間のリターンマッチ踏査を始めた。

1月の例会は新年会の翌日、祖母山から西へ連なる主稜線上の県境線を踏査した。九州の中央にそびえる祖母山は、古くは九州一の高山とされ、来朝したウェストンが富士山に次いで登ったのが祖母山だった。祖母山は大分、宮崎、熊本の3県にまたがってそびえるが、頂上は大分と宮崎に占められ、熊本は頂上から西へ2キロの地点・3県境までである。

今回は3県境のある千間平（1447メートル）から県境線を西へ進み、筒ヶ岳（1296メートル）の先までの踏査を行うもので、数年前まではわずかな踏み跡が残るだけのスズタケとイバラの密生する尾根だった。

早朝、熊本市を発った一行6名は祖母山の熊本県側の登山口である高森町神原から取り付いた。標高差500メートルの急な登山道を約1時間半で千間平へ出た。ところが久しぶりにヤブコギを覚悟して登ってみると最近、地積調査か何かが行われたらしく、尾根には立派な切り分けができていた。おかげで踏査は順調に進み、1時間足らずで筒ヶ岳に着いた。

筒ヶ岳の三角点のあるピークから、山名の由来となった岩峰を往復したあと、さらに県境稜線を西へ進んで標高1100メートル地点から強引に急な尾根を神原集落の牧野へ下り、登山口へ戻った。

次回から、いよいよ舞台は県南部に移る。いずれもヤブの多い難コースが続くが、残るは3区間となった。3月中には終了して、4月からは中央分水嶺踏査に取りかかる予定である。（田上　敏行）

ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
（国土交通大臣登録旅行業1167号）

東京／〒160-0008 東京都新宿区三栄町23　TEL 03-3341-0030
大阪／〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号　TEL 06-6946-9111
名古屋／〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オークラビル6F　TEL 052-788-2422

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

イラスト・宇都木慎一

39年ぶりの再会

長尾　悌夫

1965年、ゴジュンバカン初登頂に成功した明大隊が、インド隊のエヴェレストBC、早大隊のローツェ・シャールBC歴訪の旅を終えてクムジュンで休養していたときのこと、シェルパの少年が治療をもとめて私のところへ来た。名前はアンツェリン、クムジュンの村長の息子でヒラリースクールの生徒だった。とても怜悧な少年で、治療を終えるときちんと英語で礼を述べた。

その治療を機にアンツェリン少年と私はすっかり仲良くなり、彼は母親や姉を連れてきて私に紹介したりした。明大隊は植村君と登頂したペンバテンジンを日本に連れてきたので、帰国に際し、学用品やソフトボールのボールなどをアンツェリンに渡してくれるようクムジュン出身だったペンバテンジンに託した。

しばらくするとアンツェリンから予想もしていなかった礼状が届いた。当時のネパールの劣悪な郵便事情を考えるとよくぞ届いたと感心したし、アンツェリンの律義さにすっかり嬉しくなり彼との文通が始まった。ある時、インドから手紙が来て、医学を学ぶためにインドに来ていること、シェルパ族のドクター第1号になるんだと抱負が書かれていた。それは素晴らしいことだ、頑張れ！　とエールを送ったが、風土の違いからか彼は病気になってしまい、医師になることを断念して帰国した。

やがてカトマンズでトレッキング会社を設立したと連絡があり、またベルギーの女性と結婚し子どももできたと手紙をくれ、ドクターがネパールに来た時は世話をするから連絡をくれと書かれていた。その後何度かネパールに行く機会はあったが、山仲間でもある日本の旅行社の世話になり、アンツェリンの会社を使ってやれなかったので何となく連絡するのが憚られ疎遠になっていた。

1980年、慈恵の隊を率いてガネッシュヒマールV峰に遠征した時、ネパール側隊員として参加したラクパドルジェがクムジュン出身とわかり、アンツェリンの消息を尋ねると、彼とは幼なじみでよく知っている、元気でトレッキング会社を経営しているとのことで安心していた。

そして昨年の年次晩餐会、ポカラ国際博物館完成のお礼にネパール登山協会の会長が来日し出席していた。その名前がアンツェリン、もしやあの時の、と思ったが、記憶の中での愛くるしいアンツェリン少年と堂々たる体躯のアンツェリン会長とはどうしても一致しない。ネパールでは同じ名前の人はたくさんいるし、違う人だろうと思ったりしたが、確かめたい気持を抑えることができず、彼の席に行き尋ねた。

「あなたの生まれはどこか」「クムジュンです」「お父さんは村長さんではなかったか」「そうです」との答、やはりあの時のアンツェリン少年だった。39年ぶりの再会、彼もよく覚えていてくれたし、とても嬉しい再会となった。別れ際に彼は大きな紙袋を私にくれた。中にはアンツェリンが経営しているトレッキング会社、航空会社、ヘリコプター会社、ホテル、リゾート会社等の資料が詰められており、彼の実業家としての成功を物語るものだった。

アンツェリン少年と私　1965年、クムジュンにて

来日を報道した新聞で、彼をシェルパ族の立志伝中の人物として紹介していたが、インドほどではないにしてもまだカースト制が存

在するネパールでよくぞここまで、とアンツェリンの努力に頭の下がる思いだった。

イラスト　宇都木 慎一

ふたつの会報

山本　健一郎

昨秋、会報700号に今村さんが書かれた編集後記を読んで、私は浦松佐美太郎さんが昭和5年10月に会報を創刊され「会報発行の第一の主旨は毎月の会務ならびに会の情勢を会員に報告することにあります」と書かれていることを初めて知った。後輩としては迂闊なことである。そういえば浦松さんは針葉樹会（一橋山岳部OB会）の会報の編集もしておられたはず、となれば針葉樹会会報は浦松さんが日本山岳会の会報を真似て創刊されたのに違いないと思った。

そこで針葉樹会会報がいつごろ創刊されたのか調べてみたら、なんと日本山岳会の会報創刊より半年ほど早い昭和5年4月に創刊されていることを発見した。

そこでこの辺の事情について記事がないか探してみたら、針葉樹会報50号（昭和10年11月10日刊）に吉沢一郎さんが「50号の記」と題する記事を寄せておられた。それには「Mくんの話によると多摩川のすき焼きをやりに行った電車の中でその相談が持ち上がったものらしい。会報第1号の出来たのが翌年の5月ごろだったと思う。もっとも4月中旬には私はすでに大阪の吹田に引っ越して了っているから判然としたことはわからない。（中略）私の記憶に誤りなければ日本山岳会の会報は浦松氏の発案になるもので、その又源が吾が針葉樹会報なんだから山岳会の会報からみれば生みの親みたいなものだ」といかにも吉沢さんらしい威勢の良い記事が見つかった。まだ通称クマさんが30歳くらいの時のことだから、会員諸氏もなにを生意気ななどと目くじら立てずに笑ってお読みいただければ幸いである。

昭和5年に創刊されたこの針葉樹会報は昭和17年5月、紙質の悪い薄っぺらな98号が出たのを最後に途絶えてしまい、戦後昭和27年9月にようやく復刊1号が出され、平成16年1月に100号が刊行される運びとなった。

ところで戦前の98冊の完全揃いは、多くの先輩が戦災に遭われたため、私の知る限り望月達夫さんのお宅にしかなかった。吉沢一郎、磯野計蔵（明治屋社長・図書室に磯野文庫を寄贈された）、浦松佐美太郎、小谷部全助、望月達夫、大塚武（元北海道支部長・昭和15年1月滝谷第4尾根の登攀者）など当会の会員でもあった方々の活躍ぶりと、日本山岳会の様子を側面から伺い知ることのできるこの資料が、望月家のご厚意で当会の図書館に納められた。

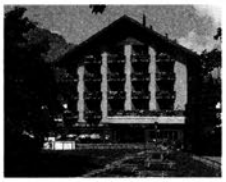
先の当会へのご寄付と併せ、望月さんのご遺族に改めて謝意を表したい。

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデューをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。

Hotel eiger WENGEN



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ お申込みは **アルプスウェイ** ALPS WAY. We Love Swiss
http://www.fellow-travel.co.jp/
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541　Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp
〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984　Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp
主催：株式会社フェロートラベル　ボンド保証会員 (社)日本旅行業協会正会員
国土交通大臣登録旅行業664号　協賛：ウェンゲン観光局・ツェルマット観光局　後援：スイス政府観光局

海外の山

韓国登山家たちの14座登頂

江本　嘉伸

筆者がこの「海外の山」のコラムを書き始めたのは、1985年2月（476）号からで、その最初の原稿のタイトルは「韓国の登山界」だった。韓国の登山家たちが1984～85年の冬期ヒマラヤ登山に注目すべき成果をあげていることを紹介し、70年代立て続けに失敗したマナスル登山を乗り越え、短期間にヒマラヤに進出、成果をあげている韓国のヒマラヤニストたちの活躍にエールを送る内容であった。

しかし、21世紀になって、その韓国の登山家たちの中から、次々に3人もの「8000㍍14座登頂者」が出るとは、予想もできなかった。日本はまだひとりもいないのに、である。

2月21、22日、八王子の大学セミナーハウスで開かれた日本山岳協会主催の「第42回海外登山技術研究会」の目玉は、「セッション1・8000㍍14座完登の韓国ヒマラヤニスト大いに語る」だった。自身がヒマラヤ8000㍍峰の登頂者である月刊誌『Mountain』の発行人、南善祐（ナム・スンウー）氏が詳しく韓国登山界のヒマラヤへの挑戦の歴史を語ったあと、14座登頂者の厳洪吉（ウム・ホンギル）が登場、『私は生きて帰った』というタイトルのKBS局制作のビデオ映像をまじえて、14座登頂に至る足跡を報告した。

8000m14座について語る厳洪吉（ウム・ホンギル）さん　(2/21 江本)

45歳になった厳氏は、1985年のエヴェレスト（この時は7800㍍まで）以来、なんと43回もヒマラヤに繰り出している。88年にエヴェレストを登頂して以後、あちこちのジャイアントに登り、「95年に全座登頂を意識した」という。14座登頂者、ホアン・オイアルザバルらスペインの登山家たちと5回も一緒に登ったのだそうだ。

「14年間、青春をかけて登り、目標を達成できたが、8人の仲間を失うという大きな代償があった」と厳氏。なかでもアンナプルナは「一番忘れられない、涙と辛さをくれた山」という。4回も失敗し、3回目の挑戦では仲間を失った。14座のうち酸素を使ったのは、エヴェレスト、K2、カンチェンジュンガのビッグ3のみだった。

1986年、ラインホルト・メスナー（イタリア）が16年かけて14座登頂をやってのけて以後、14座登頂者は、ヨーロッパ勢を中心にたて続けに7人を数えた。厳は、その後の8人目の達成者といわれるが、韓国にはもうひとり強力なクライマー、朴英碩（パク・ヨンスク）がいて、厳より早く14座に登頂した、とも伝えられている。14のピークを登ったのは疑いないとして、いつの時点で「14座を達成」したのかについては、はっきりしていない、ということのようだ（ちなみに電子情報の「Everest News」などでは、達成時期は明記せず、ライバル同士の韓国の2人の名を並列的に記している）。

朴は40歳。7大陸最高峰登頂を成し遂げ、いまは南北両極点に挑戦している。「14座、7大陸、3極点」が目標だ。もうひとりいた。大韓山岳連盟の38才の韓王龍（ハン・ワンユン）も94年のチョー・オユーを手始めに登り続け、2003年に14座登頂者となった。〝ナンバー登山世界〟で3人ものヒーローを出した韓国の底力を見る気がする。

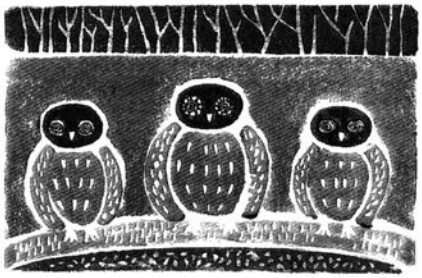
韓国社会では、オリンピックのマラソン優勝者への破格の優遇など、世界的に注目されるスポーツや文化活動の成果に対する韓国社会の評価はとりわけ高い傾向がある。登山の世界でも日本以上に〝記録達成〟への強い願望があるように見える。

基調講演を行った南氏によれば、韓国の海外登山は1980年代に海外渡航が自由化されてから活発となり、ソウル五輪が開催された88年以降、〝黄金時代〟にはいった。

エヴェレストとローツェの同時登攀など意欲的な登山が行われ、8000㍍峰登頂者が増えた。それが、「98年以降、転換期に入った」と、いう。新たな地域への志向、壁ルートへの挑戦、隊の小型化などの傾向が強まり、新時代に移行しつつある、というのである。

海軍水中爆破特殊部隊の隊員だったという厳は、竹島まで3日間、300㌔をリレー式で泳いで渡った驚くべき体力の持ち主でもある。「14座達成」へのモチベーションの高さもさることながら、破壊的なパワーは、日本の登山家たちにはない何かだ。

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥　版画・奥野渓石

湯原公浩、中川博樹、泉久恵・編
別冊太陽『日本の探検家たち』

写真や図の多い、いわゆるムック形式の本。「日本人の冒険と探検」を巻頭におき、蝦夷・千島、南洋諸島、シベリアと周辺、チベット、ヒマラヤ、極地、南・北米ほか、の7章のもとに38人の探検家の足跡と業績を概説する。

そこでだが、私たちはそのうちの何人を知っていようか。まず、表紙を見て驚き、このコウモリ傘をさす村夫子然とした人物が笹森儀助だと教えられたにしろ、彼の名に覚えのある人はほとんどいないに違いない。さらに土方久功、大黒屋光太夫、ジョン万次郎など普通には探検家といえないような人物までが取り上げられていて、再度驚くだろう。

だが、読むうちになんとなく納得してくるから不思議であり、もう一度、探検とはなにか、冒険とはなにか、を考えるきっかけにもなると思う。ほかに鼎談「われらの時代の探検・冒険」「探検登山の用具史」「探検の変容／探検記ファンの見た探検の過去と現在」がつく。

2003年10月　平凡社発行
152ページ　2600円

（横山　厚夫）

平位剛・著
『禁断のアフガーニスターン・パミール紀行』

本会会員でワハーン回廊の秘境（パミール）中の秘境であるヴィクトリア湖へ潜入した人がいる。その人、平位剛ドクターが、このほど1999年から2001年にかけて3度、ワハーンの心臓部を踏査した記録が公表され、1冊の本となった。十九世紀前半のジョン・ウッド以来、160年ぶりの記録である。

当然のことながら、日本人の初めて目にした、この地域の高峰（全て6000メートル級だが）の貴重な写真、そこで暮らすワヒ人（ワハーン谷の住民）やキルギス人の生活ぶりの詳細なリポートもカラー写真で収録されている。

さらに平位ドクターがかつてワハーン谷で何度か敢行した登山（広島大医学部山岳会）の記録や、それ以後十数度ワハーンの南側のチトラール領ヒンドゥ・クシュやヒンドゥ・ラジ山脈で行った登山や、ワハーン谷との国境山稜中の多くの峠を越えた珍しい紀行文も併せて読むことができる。

1968年以来、私も再三越えたダルコット峠やカランバール峠はもちろん、バロギール峠やカン・フン峠へ立った珍しい文章や写真もあり、かの地への憧憬をかりたてられる。私は平位ドクターのワハーン潜入の途上、何度もヤルフーン河源地域で出会ったことを、限りなくなつかしく思いつつ、本書を読んだ。

2003年12月　ナカニシヤ出版発行　487ページ　3800円（本体）　なお、本書の申込は直接著者へ（割引あり）。TEL 082－246－0387

（雁部　貞夫）

▲世界的に類を見ない貴重な探検記録

禁断のアフガーニスターン・パミール紀行

ビクトリア湖畔

――ワハーン回廊の山・湖・人――

平位　剛 著

A5判 480頁 定価3,800円

地政的理由から永らく外国人の入域が閉ざされていたアフガーニスターン東北部に盲腸のように突出するワハーン回廊へ故マスード将軍に庇護され、1999～2001年の3年間探険に入った世界的に類を見ない貴重な探検記録。

◎好評発売中!!

定価（本体33,000円＋税）

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入
385ページ　B全判地図13葉

宮森常雄（秩父宮記念山岳賞受賞）・雁部貞夫　共著　・カタログをご請求下さい

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211　Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

INFORMATION

イラスト　宇都木慎一

◆若葉山行のお知らせ

事業委員会

恒例の若葉山行、今年は秋田の乳頭山。宿泊は乳頭温泉郷。2日目は山菜文化研究会と合流し地元の方との交流、宿泊は県の森林学習交流館。最終日にはジュンサイ摘み取り体験を計画しています。

日程　5月28日(金)～30日(日)
場所　乳頭山と五城目町・山本町
費用　概算4万円（宿泊、現地バス代、保険料等）
現地集合・解散
申込　4月28日までに氏名、会員番号、連絡先、電話番号を明記しハガキ、FAX、メールで山崎浩子宛（〒236-0033横浜市金沢区東朝比奈1-65-3　FAX045-782-8712　y-hiro@fa3.so-net.ne.jp）

＊申込者には詳細案内を送ります。

◆東大秩父演習林・自然観察会

自然保護委員会

文部科学技官の澤田晴雄氏の案内で新緑の秩父の森と渓谷へ。

日時　5月22日(土)、23日(日)
集合　9時35分中央線相模湖駅マイカーにて出発。なお、西武池袋線、関越道経由を希望であれば調整します。
定員　20名
宿泊　扇屋山荘（TEL0494-55-0456）
解散　現地14時頃
費用　1泊3食・1万円（マイカー乗合費用は実費精算
申込　住所、氏名、電話を明記しハガキかメールで川越尚子宛（〒185-0011　国分寺市本多3-7-31　kawagoejac@mti.biglobe.ne.jp）

＊申込者に詳細を送ります。

◆新入会員を対象とした「徳本峠越えとウェストン祭」

山研運営委員会・信濃支部

日程　6月5日(土)～6日(日)
参加対象会員　平成15年4月から平成16年3月末入会の新会員および本会会員の希望者20名（新会員優先）。

＊詳細は来月号に掲載します。

◆第6回「森の勉強会」東海・京都・関西・広島支部

自然保護委員会

3つの森林気候帯（冷温帯、亜寒帯、寒帯）が同時に見られ、日本の高山では最も原生度の高い森林を擁し、特にトップクラスのブナ林を誇る白山にて森林生態学の座学と野外実習を行います。

日時　8月7日(土)～9日(月)
集合　7時キャッスルイン金沢（金沢駅東口徒歩5分）
解散　18時頃　金沢駅
場所　白山自然保護センター別山千振尾根（野外実習）
費用　4万円（2泊4食＋弁当3金沢現地間のバス代金、インストラクター費用など）
定員　共催4支部以外は7名
交通　前夜金沢泊または夜行（全員金沢駅集合解散とし、自家用車はご遠慮下さい）
申込　会員番号、支部名、氏名、住所、電話、FAXを明記し4月30日までにハガキ、FAX、メールで猿山昌夫宛（〒520-0864　大津市赤尾町27-12　FAX077-534-7243　m-saru@js2.so-net.ne.jp）

＊参加申込者に詳細案内と会費振込先を連絡します。

＊3000メートルクラスの夏山登山の体力が必要です。

◆上高地インタープリター発表会

市ヶ谷のタベ　山の自然学研究会

「上高地夕べのミニトーク」も9年目、浴衣掛け気分でどうぞ！

日時　3月30日(火)18時30分
会場　日本山岳会集会室
テーマ　氷河地形探勝　氷河公園・上高地の蛙、蝶、トンボ、上高地誕生の歴史など
問合　古田寛昭（TEL&FAX042-

中国国際航空ヒマラヤ越えフライト定期便就航！
特別企画
エベレスト展望とシェルパの里トレッキング10日間
●4/26(月) ¥328,000　●4/30(金) ¥338,000
国土交通大臣登録旅行業第490号／㈳日本旅行業協会正会員　ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033　名古屋☎052-581-3211　福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

949-5631）

◆国際山岳年公式報告書　山の読本『我ら皆　山の民』発刊　ヤマ・ネット・ジャパン（YNJ）発足記念フォーラム「アジアの山の民」

日時　4月17日(土)13～17時半
場所　日本大学文理学部百周年記念館（京王線下高井戸駅から徒歩10分）
申込　4月9日までにハガキで日本大学文理学部地理学科教授・水嶋一雄宛（〒156-8550　世田谷区桜上水3-25-40）
資料代　1000円（当日受付）
内容　講演「ミャンマー山岳民族～ケシから蕎麦への転作支援～」（氏原暉男・信州大学名誉教授）、「パキスタン山岳民族の生活・文化の変容」（日本大学文理学部研究班）／映像と特別講演「ネパール・ドルポの山岳民族を訪ねて」（仮題）大谷映芳

◆探索山行「南会津七ヶ岳の地形的特徴とその成因を学ぶ」　科学委員会

日時　6月12日(土)～13日(日)
場所　福島県、大嵐山、七ヶ岳
交通　東京より貸切りバス

＊詳細は次号に掲載します。

◆第7回韓国の山　三水会

期日　5月30日(日)～6月3日(木)
対象　俗離山・大芧山・摩尼山
費用　9万円（航空、宿泊、食事現地移動ほかすべて込み）
募集　限定15名　申込金即振込
申込　3月末日までに石田稔郎宛（TEL&FAX 0424-22-7505）要項送付します。

会員異動

物故

丸山尚一（2878）02・9・13
桜井　仁（6546）03・3
小川安久（8777）03・10・18
風見武秀（2205）03・12・20
遠藤　景（11882）03・12・22
渡辺靖男（12771）03・12・28
浅井秩夫（5240）04・1・14
藤原利雄（11065）04・1・16

退会

吉田八郎（1992）関西
南里晋亮（9884）宮崎
有井琢磨（9924）
高井利恭（10153）東海
高良博人（10406）
吉村啓一（10792）北海道
中村貴士（11313）信濃
松本久治（11473）宮崎
森山成貴（11591）宮崎
橋詰伯美（11901）信濃
岡田順一（12385）富山
児玉藤子（13056）宮崎

ルーム日誌

1月

6日　100周年フォーラム委員会　アルパインスケッチクラブ
7日　山岳地理クラブ　02同期会
8日　学生部　山の自然学研究会
13日　アルパインスキークラブ
14日　アルパインスケッチクラブ　100周年長期目標検討委員会　フォトビデオクラブ　つくも会
15日　青年部　97同期会
16日　事業委員会
19日　資料委員会
20日　百年史委員会　インターネット小委員会　00同期会　九五会
21日　山研運営委員会　三水会
22日　事業委員会　100周年分水嶺踏査委員会　緑爽会
23日　自然保護委員会　事業委員会　同期会連絡会議　02同期会
27日　100周年長期目標検討委員会　自然保護委員会　学生部　山遊会
28日　図書委員会　アルパインスキークラブ
29日　青年部
30日　インド登山家ダム氏懇談会　土曜会

1月来室者数　490名

❖編集後記❖

●100周年への各事業が本格的に動き始め、本部の担当者も忙しくなってきました。全会員参加を目標に分水嶺踏破も始まります。募金の方もよろしくお願いします。

●『山』の原稿もメール投稿が増えてきましたが、まだ事務局へ送られる方がいます。jac-kaiho@jac.or.jpへお願いします。（今村）

日本山岳会会報　山　706号
2004年（平成16年）3月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビュウハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　平山善吉
編集人　今村千秋
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社